

# 『ワイルドフェル・ホールの佳人』

—父権制に関して—

松原典子

## 1 はじめに

*The Tenant of Wildfell Hall*<sup>1</sup> はAnne Brontëの第二作である。ところで姉のCharlotteは、Anneの第一作*Agnes Grey*の第2版が決定した時に次のような手紙を書いている。

“Wildfell Hall” it hardly appears to me desirable to preserve . . . The choice of subject in that work is a mistake: it was too little consonant with the character, tastes, and ideas of the gentle, retiring, inexperienced writer.<sup>2</sup>

これはAnneが*The Tenant*の第2版の序文に、

My object in writing the following pages was not simply to amuse the Reader; neither was it to gratify my own taste, not yet to ingratiate myself with the Press and the Public: I wished to tell the truth, for truth always conveys its own moral to those who are able to receive it . . . . profligate companions I have here introduced, are a specimen of the common practices of society — the case is an extreme one, . . . if I have warned one rash youth from following in their steps . . .<sup>3</sup>

と自分の執筆態度を表明したことに対するものだと判断できる。Anneの言葉からは真摯な態度が姿が浮かびあがるが、彼女の語る「真実」とは何なのか。「放蕩仲間と哀れなるくでなし」とは誰なのか。Charlotteはフィクションである*The Tenant*をリアリズム小説だと捉えたことから引用2の手紙を書くことになったのであるが、Charlotte Brontëという作家

としてのものなのか、姉としてのものなのか迷う部分もある。姉としてのものであると判断する方が自然である。それはブロンテ家の恥部である唯一の男子Branwellを、主人公であるHelen Huntingdonの結婚生活を破綻に導いたArthur Huntingdonと彼の悪友たちの姿を彷彿させているからである。<sup>4</sup> しかし、もう一つ考えられることがある。それは*Jane Eyre*をはじめとしてCharlotteの作品が父権制に縛られていたからである。<sup>5</sup> Charlotteはビクトリア朝社会を揺るがす女性の自立を宣言した*Jane Eyre*で女流作家としての地位を不動のものとしたが、作品は父権制に縛られ、結末は当時の女性が夢見た結婚を人生最高の時<sup>6</sup>として描いている。これは父権制に屈したからである。それに対して*The Tenant*は、一言で表わすと、母権制の作品である。であるからこそ、CharlotteはAnneの*The Tenant*に対し、異を唱えたと考えられる。この「母権制」に関して小論を進めていくことでビクトリア朝父権制との関係を探究する。

## 2 登場人物と母権制

### (1) Helenの場合

ヒロインのHelen Huntingdonから検証していく。彼女は成長過程において、Charlotteのヒロインたちと同様に親不在の子供として登場する。ただCharlotteのヒロインたちと異なり、資産家で大変人望厚く、彼女を自分の子供として愛情を注ぐMaxwell夫妻を保護者として美しく成長し、しかも性格的にも大変好感を持てるレディとして成長した。しかし幼少時の生活が全く描写されていない。それがHelenを不可思議な人物と捉えさせる効果をもたらしているともいえる。つまりHelenの幼少時の過程を描かなかったことは、本名を隠してWildfell Hallに住む正体不明のMrs.Grahamという未亡人の姿をより強調するための手法だったとも考えられる。

ところで*The Tenant*の主題はHelenを中心とした結婚であるが、Charlotteのヒロインたちが歩んだ苦勞の道<sup>6</sup>とは異なっている。それは、Maxwell夫妻が姪に幸せな結婚をさせるために熱心に相手捜しをしたことである。夫妻の行動はビクトリア朝の保護者として常識である。ところがHelenが選んだArthur Huntingdonには良くない噂が広がっていた。当然、特にMaxwell夫人は彼を警戒し、少々、年はいっているが朴訥としたMr.Boarhamを姪の結婚相手として選ぶ。ところが「家庭の天使」予備軍として育てられたはずのHelenは、自分の判断力と人間改造に必要な能力を過信し、Maxwell夫人の助言に耳を貸さない。自我の強い彼女の性格が結婚生活の可否を想像させる筋立てになり、「結婚」が作品を構成する柱となっている。このプロセスはCharlotteの女性の自立宣言以上に、新しい女性の生き方の見本であり、「ウーマン・リブの最初の声明書 (マニフェスト)」<sup>7</sup>とも言われている。結果としてHelenはMaxwell夫人の人を見る眼に遠く及ばなかったことがArthurとの結婚に失敗したことで明白となるが、それでもAnneが描いた女の生き方と能力にはCharlotteを超えるものがあることを納得させてくれる。

Helenの人生をもう少し詳細に見ておく。彼女が自分の能力を過信したと上述したが、その点についてである。Arthurとの結婚で、自分の人を見る眼がなかったという事実は、一

粒種のArthurに与える悪い影響によって決定的なものとなる。また夫とAnnabella Wilmotとの情事はHelenにとって苦悩であるが、それ以上に母親としての立場がこの結婚生活を自らの意志で破局へと向かわせる。たとえ夫が結婚生活を維持できない状況を作った元凶であっても、結婚すれば夫に従うものという時代的風潮の中で、妻の苦悩は認識されることすらないのが常識であった。つまり結婚前は父親の下、結婚後は夫に従うことが強要されていた。その中で母親としての意識が、妻という立場をも超えたということ自体が父権制に楯突いた人生を選択し、反社会的の生き方を選択したこととなり、そこに強靱な人間としての姿勢が表れている。

... if I hate the sins I love the sinner, and would do much for his salvation ... (119)

と、自分の力でArthurを改造することができるという自惚れが、結婚によって

I cannot shut my eyes to Arthur's faults; and the more I trusted so, is, I fear, less warm and generous than I thought it. (147)

... if I had known him in the beginning as thoroughly as I do now, I probably never should have loved him ... I was wilfully blind ... (161)

と変化する。自己過信にやっと気づいたのである。にもかかわらずHelenは世の女性たち同様Arthurとの結婚生活を続行する。その中で唯一の救いは、“I should like to be less of a pet and more of a friend.” (161) と語る彼女の強さである。自分を客観的に分析できる精神状態でいられたことは、結婚という父権制社会の中で自分を見失うことなく生きる力を有していたのである。“my heart was not his slave” (167) というHelenの叫びは父権制社会への抵抗である。一方、Arthurの女性観 “first of woman's virtues” (176) は、“I won't be dictated to by a woman, though she be my wife.” (187) という典型的な父権制社会の夫であった。

... his idea of a wife is a thing to love one devotedly and to stay at home – to wait upon her husband, and amuse him and minister to his comfort in every possible way, while he chooses to stay with her; and, when he is absent, to attend to his interests, domestic or otherwise, and patiently wait his return; no matter how he may be occupied in the meantime. (191)

この男に屈せずいられたことは、Helenの強靱な精神力が21世紀の人間からも十分喝采できる価値ある思想の持ち主であったことを証明してくれる。彼女にこの精神力を維持させたのは愛息Arthurに対する母権である。

I had my darling, sinless, inoffensive little one to console me . . . (193)

I hope to save him from one degrading vice at least. (19)

I will lead him by the hand . . . till he has strength to go alone . . . (20)

母としてのHelenの愛が、“my only treasure” (17) である我が子を夫から離すための逃避を成功させた。彼女は息子と家政婦のRachelを伴い、二度目でHuntingdonからの脱出に成功した。人間性に欠ける遊び人である夫Arthurから息子Arthurを遠ざけることが、母としての義務であると考えたのである。当時では無謀ともいえる行動である。夫からの逃避を行動に移すことなど、当時の女性だけでなく、父権を持つ男性ももちろん想像だにしないものであった。ところがHelenは最初の失敗にもめげず再度果敢に挑戦した。これこそ母の力。母性の勇気ある行動である。母性が父権を打破したのである。成功した彼女はWildfell Hallに隠遁し、生活の糧を得るため絵を売って生活費の一部に当てるが、自分の才能を活かすという考えも当時の女性に許されるものではない。自分の才能で自立することは、Jane EyreをはじめとしてCharlotteのヒロインたちに共通している。Anneの処女作*Agnes Grey*のヒロインの姉Maryも絵を売って家の再建の手助けをする。Helenもブロンテ姉妹の多くのヒロインと同様、自立を目指す父権への対抗馬である。

次にHelenの再婚に至る人生を辿ってみる。Helenという人物は作品中に全てが描かれているわけではない。推察すると少女時代はHelen Lawrence、結婚してHelen Hungtingdon、別居中はHelen Graham、再婚でHelen Markhamという人生変遷を経験している。彼女は自分の意志で相手を選び、そこで挫折し、再度自分の意志でやり直すという道を選んだが、これは父権制の時代の中では大変希有なものである。彼女の場合、背景に財産と階級の二つを保持していたという事実が、正直に自分の生きる道を進むことを可能にした。一般女性が彼女のような結婚を選択をすることは考えにくい。二つの背景を持っていたからこそ父権制社会にあって、その対極にある母権制を生きることが可能となったのである。

My father has entirely given me up to their care. I have never seen him since dear mamma died when I was a very little girl . . . (138)

詳細な描写はないが、父と生別したHelenには潜在的に亡き母に対する強い思いがあったに違いないし、父への悪意や憎悪が潜在的に存在していた。“my unfortunate father” (289)、これがHelenのトラウマとなっている。彼はアルコールで身を持ち崩し、Helenに父権制に反する生き方を助長させたのである。彼女が再婚者として選んだ相手は父権制の中で育ち、父の死によって自ら父権を担う立場でありながら、母という母権でありながら父権を有する権力者から離脱するきっかけをHelenとの恋愛に見いだした男性である。しかもこの結婚相手は自ら父権制の中で生きるという姿勢が希薄であり、結果、Helenからの求愛に応じるこ

ととなった。HelenはArthurという人間的に否定される夫から逃れ、自らが父権を演じることのできる相手と再婚することとなった。彼女の言葉がそれを証明してくれる。

... my marriage is to please myself alone ... (386)

この言葉は最初の結婚の時には伯母の対して発せられたであろうが、今回は自分の相手に対して毅然とした態度でされた。彼女は失敗した結婚生活から、夫に頼らず、子供を守り、再婚の時期が来れば今度は自らが父権を行使できる相手を選ぶことを学んだのである。彼女の言葉は彼女の人生の変遷とともに、発する相手が変わっただけで彼女の性格には変化はなかった。Helenの再婚は、自分の力が及ばない相手に征服されたことへの反発として、自分に行使できる権力を与えてくれる柔軟性を持った相手を選ぶことで、相互に愛を分かち合うことが可能になると信じていたからの結果である。

## (2) Gilbertの場合

Helenの再婚相手のGilbert Markhamの人物像を追っていく。

Helenとの恋愛は彼自らの意志によるものであるが、結婚は相手であるHelenの意志によって敷かれた道に従ったものである。Wildfell Hallに滞在している間はGilbertの力で事は運ぶが、彼女が伯父の財産を相続したことにより、階級も含め父権を行使できる相手ではなくなっていた。父権社会の一員になったHelenは、自らGilbertにプロポーズする。

This rose is not so fragrant as a summer flower, but it has stood through hardships none of them could bear: the cold rain of winter has sufficed to nourish it, and its faint sun to warm it; the bleak winds have not blighted it, or broken its stem, and the keen frost has blighted it. Look, Gilbert, it is still fresh and blooming as a flower can be, with the cold snow even now on its petals. Will you have it? (384)

彼女のプロポーズをGilbertは理解できない。咄嗟のことで対応できずにいる彼の目前で、彼女はクリスマスローズ<sup>8</sup>を投げ捨てる。彼女の言葉にはGilbertと知り合ってから辛い日々が彷彿としているのであるが、彼女の苦悩と愛の告白をGilbertは理解できない。朴訥、慎重、実直が彼の代名詞としてふさわしい。にもかかわらずこのプロポーズで結婚できたのはHelenという他力によるものである。

しかしGilbertとHelenの結婚は茨の道であった。GilbertがHelenを知ったのは彼女が一人息子のArthurとWildfell Hallに引っ越してきた時である。当時彼は母を中心に妹のRoseと弟のFergusの3人家族で、未亡人の母はMarkham家の肝っ玉母さんといった存在感ある人物であった。Gilbertは父の遺言で“gentleman farmer”(3)として跡を継いだ。つまり紳士階級の自作農の長男としての人生は父の指示によるものであった。

. . . my father, who thought ambition was the surest road to ruin, and change but another word for destruction . . . He assured me it was all rubbish, and exhorted me, with his steps, and those of his father before him, and let my highest ambition be, to walk honestly through the world, looking neither to the right hand nor to the left, and to transmit the paternal acres to my children in, at least, as flourishing a condition as he left them to me. (3)

このような人生決定に対して誰も批判などする時代ではなかったため、世間に出たいという野心を持っていたGilbertも、大半の人間同様、Markham家の大黒柱である母のもと、家を守る立場に甘んじていた。

ところがこの村にMrs.Grahamが居を移したことで、父権制の中での少年期と青年期から母権制の中での成年期の一時期を過ごした彼に、これからの一人前の男としての人生に変化が見られることになった。村の女たちやMilward牧師、また家族の反対にも関わらず、この謎めいた未亡人Helenへの思いを募らせていく姿は、母中心の家庭の中での反乱と考えることもできる。では、この反乱はGilbertが母権制に対して行なった行動なのかというと、そうではない。彼は自分の意志で周囲の反対を押し切ってHelenを将来の伴侶に選んだわけで、自分より力のある者に屈せず、つまりは父権制という枠組みからの逃避に成功したのである。Markham夫人の母権社会でありながら父権の象徴であった父亡き後のMarkham家から自立したのである。記号で表わしてみると、父在りし時の父権制をマイナス(-)、父亡き後の母の時代は母権制ではあるが母中心の疑似父権制、これもマイナス(-)と表わすとGilbertが母の反対にも関わらずHelenを選んだのは(-)×(-)= (+)となる。この記号式からわかるようにGilbertの人生は(力あるもの)=父権制に反するものであることが理解できる。父権制に反するものといえばそれは母権制である。彼自身は無意識であったかも知れないが母権制の人生を選択したと言える。次に(-)+(-)=(-)となる時は、最後の(-)は強大な父権制に落ち込むものと考えられる。そう考えれば、たとえ記号式が(-)を表示しても、Gilbertにとっては父権制大の世界が存在するだけで、彼の思考の中にはそれに相反する、あるいは相殺する人生が広がる結果となり、母権制社会への一抹の望みを賭けた人生の選択であるという推論が成り立つ。

. . . when I marry, I shall expect to find more pleasure in making my wife happy and comfortable, than in being made so by her: I would rather give than receive. (42)

「与えたい、守りたい」という結婚観をビクトリア朝の女性が持っていたであろうか。父権制の中で「家庭の天使」としての生き方を強要され、それを当然と受けとめていた時代には女性が自分の結婚観を持つこと自体希有だったはずである。夫も「与えたい、守りたい」と

いう思いを持っていなかったであろう。男性は「家を守る」ことが当然であり、配偶者はその手段であり、真実の愛こそが結婚であるという価値観は少なかったと想像する。「与えてやっている、守ってやっている」という押しつけ感が常識ではなかったか。Gilbertの「与えたい、守りたい」という結婚観は、男は女の上に君臨するもの、という大方の若者の夢とは対極のものである。これは彼の心の中の父権制が崩壊していた反動に起因している。確かに彼の周囲には時代を象徴するような、結婚こそ人生の目的であり、終着駅であるために自分を売り込み、少しでも良い条件の男性と結婚したいという女たちが多くいた。しかし彼女たちとは異なり、Helenのようなベールに覆われた女性に恋をしたということも、自分の周囲の生き方に対抗する考えが潜在的にあったのである。HelenがGilbertを選んだ要因は“your fidelity” (386) だった。彼は選ばれる側であり、しかもHelenの望む忠実さはMarkham夫人の影響であった。結局の所、Gilbertには長男でありながらMarkham家の跡取りとしての覚悟がなかったのか。あるいは父権制社会の落ちこぼれであったのか。父権を備えていたHelenに選ばれたという事実が、Gilbertには父権が備わっていないことを証明する結果となった。言い換えれば、彼には母権か擬似母権が備わっていたのである。二人の結婚はArthurに縛られた不運な結婚からの解放を成功させることであり、母を知らずに成長した彼女を慰める存在がGilbertであった。

### (3) その他

主人公の二人以外に「母権制」を意図として登場させられたと考えられる人物がいる。その代表格はGilbertの母、Markham夫人である。彼女は保守的な人間であるが、家のことになるとMarkham家の大黒柱である。影響力の強い人物として上述したが、それは次のような描写から明白である。家を守るために生きている彼女は、“I always look after the brewing myself” (28) と宣言する。しかし夫に対しては良い妻であった。

I'm sure your poor, dear father was as good a husband as ever lived . . . .  
He always said I was a good wife, and did my duty . . . always did justice  
to my good dinners, and hardly ever spoiled my cookery by delay . . . . (42)

ところが夫の死後、家を守るために父権を持つ存在に変化した。変化していった、というより変化させられた、あるいは変化せずにはいられなかった、という方が正解かも知れない。彼女が家族を見守る姿はもちろん母である。ビクトリア朝の象徴である「家庭の天使」の延長線上にある、完成された母である。Gilbertが“honoured lady” (4) と崇めた母は、家長でもある。家督はGilbertが相続したが、母としては24歳の息子にまだ任せられないのである。次代の家長であることは重々承知していても、農業だけでなく醸造をはじめ、Gilbertを夫と比較すると、まだ一人前の男として認めることができない。父権制社会の中で夫に従うという形の家庭経営をすることに生き甲斐を見いだしてきた自分にとって、母権と父権の両方を使い分けることは難しく、息子が父権制社会の中で一人前の男として生きていく為には自らの姿勢を父権的なものに変える必要があった。家督相続はGilbertだけのものであり、

彼の自由になるわけだが、彼にはまだ家を守り、維持していくだけの権威が備わっていないと母には思えるのである。Gilbert自身“since my mother so strongly objects to it” (37) というように、母の判断に異を唱えることなどできない状況にある。

しかし人間は立場と状況によって変化する生き物である。Markham夫人の場合、母でありながら、父になってしまった。世の親同様、父権制社会での結婚をさせようとする強権を行使しようとする結果、訳ありげなHelenとの交際すら許すことはできない。何事でも強権を発動すればその逆の結果を生むことはよくある。こう考えると、Markham夫人は最終的に父権制下の人物となり、彼女との生活がGilbertに母権制に対する憧れや郷愁を無意識のうちに与えることとなった。

Take my word for it, you will. (p.31)

自分の言うことを聞いてほしいと願う世の中の親全てに当てはまる。この言葉にはもちろん母としての思いもある。しかし同時に、家を亡き夫から託されたという責任感から湧き出てきたのである。

もう一人Maxwell夫人を見ておく。彼女には実子がいない。夫とStaningleyのGrassdale屋敷に住む上流階級の女性である。彼女とHelenの関係は作品の中で明白に語られていない。確かに「おば」であるが、伯母なのか叔母なのかは不明である。今後は「伯母」として表わすことにする。一方、Maxwell氏の親類に関する描写はまったくないので、Helenはただ一人の姪ということになる。Helenの成長を見守ってきたのがMaxwell夫人であるという事実だけが描写されている。彼女はHelenの成長だけを生き甲斐に、母の役割を担ってきた。Helenには階級に合致した「りっぱな」男性と結婚させることを願い、結婚に対する警告と自分に誇りを持つよう促す。

I want to warn you, Helen . . . to be watchful and circumspect from the very commencement of your career, and not to suffer your heart to be stolen from you by the first foolish or unprincipled person that covets the possession of it . . . neither your uncle nor I are in any hurry to get you off our hands... for you can boast a good family, a pretty considerable fortune and expectations . . . you have a fair share of beauty . . . (103)

Principle is the first thing, after all; and next to that, good sense, respectability, and moderate wealth . . . (104)

伯母が選んだ人物はMr.Boarhamである。彼女は彼こそ姪を託すに価値ある人物として疑わない。ところがHelenは40歳の彼を拒否する。Boarham氏は“all a father’s care” (111) と自分の存在を主張する。彼女は孤児同様であり父の愛に飢えていたはずだが、“father”と

宣言したBoarham氏を拒絶する。伯母が父権制社会の中から結婚相手として推挙する人物を彼女は拒否したのである。伯母の姪を幸せにしようとする生き甲斐はここで崩壊する。彼女は伯母の常識的父権制的結婚観による夫選択の価値基準に服従することなく、自分流の結婚観を貫くことが伯母への反発だとは考えていない。彼女は愛あるMaxwell家で自由に成長したが、実の子でないという部分が双方の中に無意識のうちに存在していたかもしれない。であるからHelenが自分の意志を行動に移すことになったのである。一方、Maxwell氏は姪が恋した知人の息子のArthur Huntingdonを家柄が良いというだけの理由から適人だと判断する。夫婦一致はできずにいた。伯母が夫の意見に従わないということは、「反」父権制の立場を取ることにつながる。彼女は夫と対等な夫婦関係を築いてきていたのではないだろうか。夫に従属する存在ではなかった。そのことが自分の意見を持つHelenの基盤になったのである。つまり伯母は父権制社会の中で、自分の意志や意見を持つ、そして伯父もそんな妻を愛してきた事実があり、それを学習してきたHelenにとってはそれこそが次代を生きる女性としての出発点であったといえる。伯母が全ての点で父権制に相対する態度を取ったかどうかは登場の頻度が少ないので明言はできないが、結婚に関しては確かに父権制に相対する立場を取っていることは確実である。

上述してきたことだけで伯母の父権制に対する立場を決定することはできないが、“It’s old Maxwell’s.” (376) と近隣の男どもの語りから伯母の地位は明白になる。これは彼らの勘違いであり、実際は“she’d brought most of the property” (376) でMaxwell夫人が結婚時に持参したものだ。女性がそれほどの土地財産を持っていたことも不思議であるが、彼女の財産を減らすことなく、妻方の姪に相続させるMaxwell氏に驚かされる。Maxwell夫人という人物はいったいどんな女性だったのか。なぜMaxwell氏と結婚し、どんな夫婦生活を送ったのか。夫に自分の資産を守らせ、死後自分の手元に戻るようにさせたかをAnneは描出していない。だが彼女の存在はHelenに父権に対抗できる男女平等という新しい思想を定着させたことに疑う余地はない。Maxwell氏には“none but a nephew he’d quarrelled with” (376) という相続者が存在していたが、現実には妻方の姪、Helen Huntingdonに相続させたことは、彼女が自分の血縁に相続させたがっていたことを改めて知らしてくれる。彼女は父権制社会の中で、良い妻であったはずである。幸せな人生を夫と過ごしてきたはずである。しかし夫が残した財産を自分の手元に戻し、さらにはそれを自分の血縁である姪に相続させるということは、彼女の中に「反」父権制という考えが潜在的にあったとはいえないだろうか。

ところでここで一つ疑問点が浮かぶ。それは、Helenの兄Frederic Lawrenceの存在である。彼とMaxwell夫人はどんな関係にあったか。彼女の唯一の肉親としてHelenがあげられるが、ではFredericは何なのか。二人は確かにきょうだいであるが、異母きょうだいなのか。そうであればMaxwell夫人がFredericではなくHelenに実家からの財産を継がせようとするのも納得できる。彼女の行動によって、HelenとFredericの関係が作品の中で初めて明らかにされた。話を戻すと、Maxwell夫人は自分の財産を姪に渡し、姪とその子とStaningley Hallで暮らす。しかもHelenはHuntingdon家から息子のArthurが相続した財産 “a fortune of her own, besides, and only one child — and she’s nursing a fine estate for him.”

(376) を維持管理することで父権を持つ立場になっていた。

ここで取り上げた二人の女性、Markham夫人とMaxwell夫人は父権制社会の中でどのような経過で結婚したのか。当然ながら二人の人生は、Helenの人生の一世代前に属するものであり、生き方の選択肢はなく、父権制を「敢えて」選択したのではない。父権制に従うのが常識であった。その中でこの二人の女性は妻であり、母（伯母）である時、「反」父権制、つまり母権制を想像させる生き方を無意識のうちに取ったと判断できる。「家庭の天使」が妻という女性に成長した結果、「家庭の天使」は強い母権を有した。当時の社会を考えれば、彼女たちのような生き方が実際にできた女性の存在は多くはなかったはずである。これもAnneの女性の生き方に対する信念の表現であった。その生きる姿勢は父権制から脱却しようとしたものであり、父権制と相対する母権制に生きようという意識が働いていた。

### 3 Anneと父権制

*The Tenant*の作者、Anne Bront は母を知らない。母になるチャンスもないまま人生を終えた。もちろん結婚はしていない。周知のことであるが、Anneは1820年1月生まれで1849年5月に死亡した。母は1821年9月に病死しているの、彼女は1歳になる前に母を亡くしたことになる。彼女ら6人の兄弟を、母の姉が母代わりとして世話とした。小説家として名を成した3人の中でもAnneが一番伯母の愛を感じていたようである。父のPatricは大変厳格な態度で子供たちに接したので、Bronter家典型的な父権制の家族だった。*The Tenant*に及ぼしたPatricの影響を次のように捉えた批評家もいる。

The stronger characters in Wildfell Hall are all woemn, reflecting Anne's experience in a life where the only man to combine power with rationality had been her father.<sup>9</sup>

しかも唯一の男子Branwellに対する家族の期待は大きなものであった。男性主導の男性優先の家庭であった。ところがこの期待の星、Branwellが画家となることに挫折する頃から、Bronter家は男性社会から女性社会へと変化していった。しかし女性社会といっても、女性に父権が移ったということであり、女性が女性主導の生き方をするというのではない。つまりBronter家の場合、Branwellが跡取りとしての地位を喪失すると、その代役が必要になってくるが、それがその頃の長子Charlotteであった。彼女はBronter家を担うため精神的にも肉体的にもかなりの負担を抱えていた。CharlotteはBronter家という父権を継承した。妹であるAnneは特に肉体的に弱点があり、父も姉もAnneには目を掛けていた。姉が受け継いだ父権によって彼女は保護されていた。この保護がAnneにとってどんなものであったか。自分は保護され無事に毎日を過ごしている。一方、夢破れ挫折し、家族の期待を裏切り、恋愛にも破れ、酒に溺れ、死に至った兄Branwellを家族の中で一番身近にしながら救うことができなかつた自分に挫折感を覚えてもおかしくはない。墜落した兄の存在がAnneに父権制の矛盾を感じさせた。Branwellは父権制社会の犠牲者である。彼は過度の期待に負けた

が、父権制社会では男子に期待し、男子を守り、男子を立て、男子に従うのが当然であった。それが眼前で崩れ落ちた事実は、Anneの中に父権制に反する生き方を模索する考えが浮かんでもなんら不思議ではない。彼女の父権制は崩壊の中で新たな生き方を模索させることとなり、女性主導の母権制へと傾いていった。

またAnneが家庭教師として赴いた最初の雇用主のJoshua Inghamは家父長的な伝統を特に重んじるピューリタンで地主、判事、実業家であり、女性は男性に従うべきだという思想の持ち主であった。<sup>10</sup> この経験もAnneに父権制の女性に対する厳しさを再認識したのである。

She also took a much stronger stance on the necessity of portraying her scenes of debauchery realistically, fighting her corner with an energy and intelligence for which Charlotte was incapable of giving her credit.<sup>11</sup>

Patricの人となり大きな影響を与えたことを物語っている。

#### 4 AnneとCharlotte

姉のCharlotteは、女流作家としてはAnneとは比較にならないほどの知名度を得ていた。最初はJane Eyre、Wuthering Heights、Agnes Grey全てが一人の作家によるものと考えられていたが、その一人とはCharlotteであった。そんなCharlotteがThe Tenantの中に登場するArthur Huntingdonが人格を壊したBranwellだと想像した時、Anneを非難こそしていないが、冒頭で引用したように、Anneに対して厳しい作家論を繰り広げることとなった。これはブロンテ家の恥辱としてBranwellを捉えたCharlotteの立場がそうさせたのである。Charlotteは1850年にSmith and Elder社から再版の話を受けた時、The Tenantだけを除外している。自分もEmilyも触れていないブロンテ家の恥部であるBranwellがArthurのモデルだと考えたのである。彼女はAnneの行為に不快感を持ったのである。CharlotteとAnneのヒロイン、Jane EyreとHelen Huntingdonは人間として男女は平等であるという近代的感覚を持ち、自己の才能を伸ばし、それを糧として自立を完遂するという精神を共通点として持っている。

しかしビクトリア朝という父権制社会での結婚に関しては異なる点がある。Charlotteの作品を紐解いていくとその点が浮かび上がってくる。それはCharlotteの作品における父権制である。彼女の作品は全て自立を求めながらも描かれる結末は幸せな結婚である。ヒロインたちは自立を求めて苦難の人生を歩んできたにも関わらず、結婚相手と思しき男性に出会うとそれまでの人生を放棄するかのよう「家庭の天使」に納まるのである。ところがAnneの人生とThe Tenantの人物像から明白となったことは、AnneもHelenも父権制から脱却し、「反」父権制つまり母権制に比重を置いた人生を選択したことである。同時に、Helenの生き方は「反」父権制から自らが父権を持つ存在へと変化していった。

この事実がCharlotteにAnneの思想と、その結晶であるThe Tenantを軽視させたといえる。姉妹でありながら時の人であったCharlotteと異なり、寡黙で病弱なAnneはより繊細な

神経の持ち主であった。これらAnneの特徴を形成したブロンテ家という大変小さな社会と、2度の家庭教師としての社会経験から、イギリス家父長制である父権制に対抗する生き方を理想としたことにより*The Tenant*は生まれたのである。

I am satisfied that if a book is a good one, it is so whatever the sex of the author may be.<sup>12</sup>

Anneのこの宣言は作家としても自立できる自信が現れている。作品の中で描写したArthurとHelenの結婚はBranwellをモデルとした事実を昇華させたものである。Anneは自立宣言と若者に対して警告を発している。

O reader! if there were less of this delicate concealment of facts — this whispering ‘Peace, peace,’ when there is no peace, there would be less of sin and misery to the young of both sexes who are left to wring their bitter knowledge from experience.<sup>13</sup>

これが“Reader, I married him.”<sup>14</sup>と報告したCharlotteとの最大の違いである。

JaneとRochester、HelenとGilbertでは、RochesterとHelenが上流階級に、Janeは孤児の家庭教師、Gilbertは農民という具合にそれぞれのヒロインとヒーローは相対した身分に属している。この構図がCharlotteの父権制とAnneの父権制の最大の壁となっていたのである。

## 5 さいごに

*Jane Eyre*の出版は1847年で、*The Tenant*の出版は1848年であり一年という空白がある。時間的経過から推測すると、一流の女流作家である姉に対抗する意図があったかどうかは別としても、Anneは*Jane Eyre*の結末を知った上で父権制に対する自分の思想を貫く手段として、HelenとGilbertをJaneとRochesterの対極に人物設定し、Arthurに墜落したBranwellの存在をリアリスティックに描くことで彼をこの作品に凝縮投影したのである。結果、父権制に対する意識の差と、弟を一般社会に暴露したことで、Charlotteは*The Tenant*を認めることができなかった。そしてAnneは*The Tenant*で父権制社会の弊害を描出することによって女性の権利と母権への移行と威光を再認識させることとなった。

引用文献

- 1 Anne Brontë , *The Tenant of Wildfell Hall and Agnes Grey*, (London: Everyman's Library, 1976) をテキストとする。文中では*The Tenant*と記す。引用はページを記す。
- 2 Clement Shorter, *The Brontës Life and Letters* (New York: Haskell House Publishers, 1969) 2: 169 To W.S.Williams September 5th, 1850.
- 3 Oxford University Press, *The Brontës: Three Great Novels* (Oxford U.P., 1994) 599-600.
- 4 Charlotteだけでなく、多くの批評家たちもArthur Huntingdonや彼の仲間たちの放蕩ぶりの背景となったのはBranwellであると考えてきたことは、周知の事実である。
- 5 Charlotteは*Jane Eyre*で、Jane EyreはEdward Rochesterと、*Shirley*でShirley Keeldarと Caroline Helstoneの二人の親友はRobertとLouis Moore兄弟、*Villette*でLucy SnoweはPaul Emanuelと、*The Professor*でFrances HenriはWilliam Crimsworthとの結婚が最終願望であり、*Villette*のEmanuelが遭難した以外は全て「家庭の天使」の延長線上にある結婚を成就した。
- 6 *Jane Eyre*のヒロインは孤児で、Leed家の厄介者で、寄宿学校に入れられ、そこで勉学に励み優秀な家庭教師として勤めた勤務先の雇用主と重婚を回避し、その後障害者となった以前の雇用主と結婚し子供を儲ける。  
*Shirley*の二人のヒロインは階級的にも資産的にも裕福な生活であるが、両親を早くなくしたり、孤児として伯父に育てられたり、自分の愛を伝達できなかったり、死と相対する病と戦い、実母と出会い、結婚を成就。  
*Villette*のヒロインは孤児として、裕福な家庭に預けられ成長するが、家政婦を経て、大陸に渡り家庭教師から教師となり、文化の違った国での精神を磨り減らす生活の後、結婚を約束する人物と出会う。  
*The Professor*のヒロインは混血であり、孤児であり、育ての親の祖母を亡くし、大陸で生徒、教師を経て同じく両親のいない教師と結婚。
- 7 鮎沢乗光、「アン・ブロンテ研究法」、内田能嗣編『ブロンテ小事典』(研究社、1998) 166。  
*The Tenant of Wildfell Hall* (Penguin, 1980) のWinifred GérinによるIntroduction.
- 8 "Christmas rose." *The Random House Dictionary* 2 ed. 1987. 花ことばは "Relieve my anxiety" である。
- 9 Edward Chitam, *A Life of Anne Brontë* (Oxford: Blackwell, 1991) 143.
- 10 中岡寛・内田能嗣編、『アン・ブロンテ論』(開文社出版、1999) 9.
- 11 Juliet Barker, *The Brontës*, (London: Weidenfred and Nicolson, 1995) 532.
- 12 Oxford University Press, *The Brontës* (Oxford University Press, 1994) 600.
- 13 *The Brontës* 599.
- 14 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, (Oxford U.P., 1973) 454.